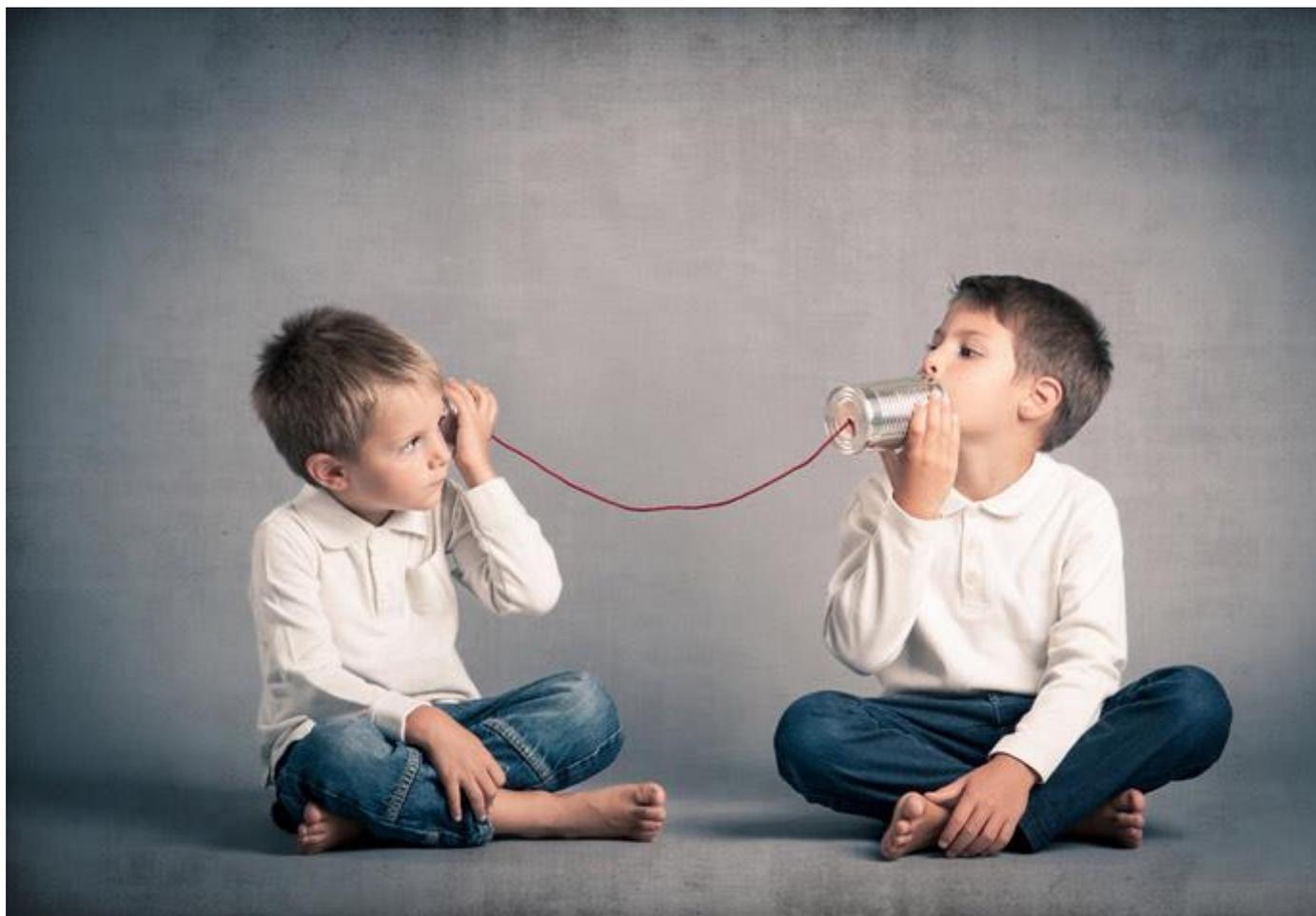


楽しくて豊かな学びのある国語

「話すこと・聞くこと」

とくほん
指導読本～小学校編～



2020 北海道国語教育連盟

巻頭言

コロナ禍における国語科教育の一方向性

北海道国語教育連盟 委員長

札幌市立陵北中学校 校長 大田 利幸

71年目を迎えた北海道国語教育連盟。全国的にも希少な小学校と中学校とが一体となった研究団体という本連盟の特色のもと、「小・中のつながり」「全道各地区のつながり」「研究のつながり」という三つのつながりを基底として、子どもたちへ確かに豊かな言葉の力が育成されるよう、国語科教育の発展に推進してきました。74回を数える全道大会を大きな柱として、脈々と続く研究の成果が引き継がれています。

しかし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、大会はもとより日常的な研究活動、教育活動もままならなくなりました。今まで積み重ねてきた指導から違う視点を加えた授業を創造しなければならない現状で、多くの国語教育に関わる先生方は戸惑いを隠せないことと思います。

「変化に最も対応する者だけが生き延びる。」

どんな状況下においても、子どもたちの学びの火を消すことはできません。どの分野でもどの教科でも今できることを精力的に発信しています。当連盟では何ができるか。そして、毎日の教育活動に従事している先生方の一助になることは何か。その一つの形がこの「楽しくて豊かな学びのある国語『話すこと・聞くこと』指導読本」となりました。すべてを網羅しているわけではありませんが、国語教育に携わる皆様の参考になれば何よりうれしく思います。

また、他領域に関しましては当連盟研究部によるオンライン研修会が開催されています。お時間が許すのであればご参加いただければ幸いです。

最後に、ご多忙の中、多くの方向性を迅速に発信してくださった連盟研究部の皆様に、心よりお礼申し上げます。

発刊にあたって

国語教育連盟「話すこと・聞くこと」の資料提供について

北海道国語教育連盟 研究部長

北海道教育大学附属札幌小学校 中島 大輔

各学校におかれましては、新型コロナウイルス感染症対策による臨時休業措置に伴い、子どもたちが在宅を余儀なくされる状況の中、家庭学習の充実や心のケア等、様々なことに留意しながら取り組まれてきたことと思います。また、臨時休業が終わり、少人数による登校や短時間の登校による学校再開の時にも、各教科の学習について、目標の絞り方などを教職員間で確認したり、年間計画を俯瞰したりして、今しなければならぬ目標を最優先して学習活動を考え、それに見合う時数を充てるようにしたことでしょう。

学校再開に合わせ、札幌市教育委員会からも、年間計画の変更例が各教科で示されています。また、文部科学省の依頼で教科書会社が作成した学習計画の変更案がホームページに掲載されたところです。

このような状況の中、実際に国語科学習の指導に取り組まれている先生方の中には、「時数減の中、〇〇の単元は、どのように進めたらいいのだろう。」

「何をどのように活用すれば、あるいは、どのように工夫すれば、〇〇の単元は子どもにとって円滑に進められるものになるだろう。」

という思いをおもちの方も、少なからずいるのではないのでしょうか。

そこで本連盟では、「先生方の今一番欲しい情報は何なのか。」ということをしっかり考え、豊かで楽しい国語科学習を創るための資料が必要なのではないかと考えました。

国語科学習では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」等の領域がありますが、その中でも特に、活動の制限がある、あるいは延期が考えられる「話すこと・聞くこと」をどう進めるかについて、お困りの先生方が多いのではないかと考えました。

そこで、下記の点に配慮しながら資料を作成することとしました。

- ・コロナ禍において「話すこと・聞くこと」の学習展開はどうあるべきか。
- ・指導を展開していく際、コロナ禍で具体的な場の設定や活動の工夫はどうあるべきか。

とはいえ、私たちが何よりも大切だと考えるのは、子どもにとって「楽しく豊かな学びのある国語」ということです。ですから、コロナ禍においても、そのことを中心に置き、資料作りに当たることとしました。

また、学校再開で多忙な先生方の負担を極力減らす、ということにも目を向けなければなりません。いくら「楽しく豊かな学びのある国語」といっても、その準備が非常に大変であったり、評価が大変であったりすれば、先生方に活用してもらえない資料とはならないからです。そのようなことにも極力配慮できるように考えました。

私たちの作成した資料が、少しでも国語科授業を担当する先生方の力になれば幸いです。

楽しくて豊かな学びのある国語

「話すこと・聞くこと」

指導読本～小学校編～



目次

巻頭言 北海道国語教育連盟 委員長 大田 利幸（札幌市立陵北中学校 校長）

発刊にあたって 北海道国語教育連盟 研究部長 中島大輔（北海道教育大学附属札幌小学校）

1. 新学習指導要領における「話すこと・聞くこと」のポイント

- 【指導事項で見ると】
- 【6年間全体を見渡すと】
- 【考えの形成を系列ごとに見ると】
- 【光村図書の「話すこと・聞くこと」を縦で見ると】
- 【「話すこと・聞くこと」を横（学級の1年）で見ると】

新学習指導要領における国語科のポイントについて、チャート図や表で整理しながら、分かりやすく示しています。

2. 現段階の課題とその対応

- ◆コロナ禍において、感染症対策をしながらどう授業を成立させるか

コロナ禍における4つの対策

家庭との連携のための4つのポイント

- ◆この状況を踏まえた新たな提案について

新たな「話すこと・聞くこと」

コロナ禍に資する対策やポイント、授業作りの視点について提案しています。

3. 授業実践例

- ① 2年「耳を傾ける」系列 「あったらいいな こんなもの」
- ② 2年「対話」系列 「道案内のしかた」
- ③ 3年「対話」系列 「山小屋で三日間すごすなら」
- ④ 5年「対話」系列 「どちらを選びますか」
- ⑤ 1年「話し合う」系列 「わくわくどきどきクイズをしよう」
- ⑥ 4年「話し合う」系列 「クラスみんなで決めるには」
- ⑦ 6年「声を届ける」系列 「今、わたしは、ぼくは」

対策やポイント等について、実際の授業での活用の仕方について示しています。

あとがき 北海道国語教育連盟 事務局次長 亀田 和人（札幌市立八軒小学校 校長）

1. 新学習指導要領における「話すこと・聞くこと」のポイント

【指導事項で見ると】

言語活動を進める**児童の思考の流れ**
に沿って指導事項が示されています。

話題の設定 情報の収集 内容の検討

日常生活の中から話題を決め、集めた材料から必要な事柄を選んだり、その内容を検討したりする。また「聞くこと」においては、話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞く。

構成の検討 精査・解釈 進め方の検討

話の内容が明確になるように、構成を考える。
1・2年では「事柄の順序」、3・4年は「理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確に」、5・6年では、「事実と感想、意見とを区別するなどして、話の構成を考える」ように。
「話し合うこと」では、進行を意識して話し合い、互いの意見や考えなどを関わらせながら、考えをまとめたり広げたりする。
※構成を考えながら改めて材料を集めたり内容を検討したりするなど、必要に応じて柔軟に展開。

考えの形成

表現 共有

適切に内容を伝えるために、音声表現を工夫したり、資料を活用したりする。

大切なことは、児童一人一人が「自分の考え」を創ること。そのためには、「話題設定～」「構成の検討～」等を経て、**しっかりと考えを創っていく学習過程**となるようにすることが大切です。

他者と考えを**共有**することで、さらに自分の考えを**深めたり広げたり**できるようにすることが大切になります。

各単元でどこに重点をかけるかについては、必ずしも上から順に図る必要はなく、**児童の実態、年間指導計画、学校の取組との関連等を鑑みながら設定**するといえます。

【6年間全体を見渡すと】

力が定着するよう、発達段階を踏まえながら
2年間で繰り返し指導事項を扱います。



6年間の積み上げ

【システムを意識して】



「話す」「聞く」「話し合う」の
系列を意識し、どのように力を積み上げて
いくのか見通しをもって指導しましょう。

話し合いでは、「話すこと」「聞くこと」
に関する資質・能力が一体となって働くた
め、指導に当たっては、「話すこと」の
指導事項と「聞くこと」の指
導事項との関連を図りましょう。

【考えの形成を系列ごとに見ると】

話すこと
話題の設定
情報の収集
内容の検討
構成の検討
考えの形成
表現
共有

話の内容が明確になるように、**構成を
考えることを通して**、自分の考えを
形成できるようにしよう。さらに、他者と考
えを**共有**することで、さらに自分の考えを
深めたり広げたりできるようにしましょう。

1・2年生	3・4年生	5・6年生
話す事柄 の 順序	話の中心が明 確になるように	事実と感想、意 見とを区別して

話の内容が明確になるように、話し手
が伝えたいことと自分が聞く必要のある
こととの**両面を意識しながら
ら聞いて**、感想や考えを形成する
ことができるようにしましょう。



聞くこと
話題の設定
情報の収集
構造と内容の把握
精査・解釈
考えの形成
共有

話し合うこと
話題の設定
情報の収集
内容の検討
話し合いの 進め方の検討
考えの形成
共有

進行を意識して話し合い、**互いの意見
や考えなどを関わらせなが
ら**、考えをまとめたり広げたりする
ことができるようにしましょう。



【光村図書の「話すこと・聞くこと」を縦で見ると】

- ◆国語の教科書（光村図書）の「話すこと・聞くこと」領域では、3つの系列（「耳を傾ける」「話し合う」「声を届ける」と「対話の練習」で構成されています。
- ◆指導の際は、以下の各系列の系統性を踏まえながら、2学年間で繰り返し指導し、子どもが確実に指導事項を身に付けられるようにしていくことを大切にします。

系列	「耳を傾ける」系列 (1学期)	対話の練習系列 (「話し合う」系列前)	「話し合う」系列 (2学期)	「声を届ける」系列 (3学期)
	ただし、1年生のみ、発達段階を考慮し、この順ではない。			
1年生	<p>「ききたいな、 ともだちのはなし」 知らせたいことを聞き手の方を向いて話し、聞き手は最後まで話を聞き、質問等を行う。</p>	/	<p>「これはなんでしょう」 二人で考えを出し合い、問題やヒントを決め、やりとりをして問題の答えを考える。</p>	<p>「ともだちのこと しらせたい」 面白いところやもっと知りたいことなどを考えながら友達の話聞く。</p>
2年生	<p>「ともだちをさがそう」 大事なことを落とさないように話し、メモを取りながら聞く。 「あったらいいな こんなもの」 言葉の使い方を考えながら、質問をして相手の考えを引き出す。</p>	<p>「道案内のしかた」 通る道の順や目印になるものなどを考え、道案内の仕方を考える。</p>	<p>「そうだんに のってください」 話題を考えながら、友達のよいところや考えが同じところを考えて話し合う。</p>	<p>「楽しかったよ 2年生」 伝えたいことを詳しく書き出し、聞き取りやすい声の大きさや速さを考えて話す。</p>
3年生	<p>「もっとしりたい ともだちのはなし」 内容や知らせたいことをはっきりさせ、話す人をはっきりと見て話し、聞き手はどのような質問をしたらよいか考えながら聞く。</p>	<p>「山小屋で三日間 すごすなら」 互いの考えを認め合い、整理しながら話し合う。</p>	<p>「はんで意見を まとめよう」 役割を決めて意見を整理しながら見通しをもって話し合う。</p>	<p>「わたしたちの 学校じまん」 聞き手の様子を見ながら、声の強弱等に気を付けて相手や目的に応じて話す。</p>
4年生	<p>「聞き取りメモの くふう」 書き方をくふうしながら大事なことを落とさずにメモしたり、メモを読み返して整理したりする。</p>	<p>「あなたなら どう言う？」 自分とは違う立場になって考える。</p>	<p>「クラスみんなで 決めるには」 役割を意識しながら話し合ったり、自分の立場を明らかにして話したりする。</p>	<p>「調べて話そう 生活調査」 大事なことが伝わるように声の大きさや速さ、強弱に気を付けたら、必要に応じて資料を使ったりして話す。</p>
5年生	<p>「きいてきいて きいてみよう」 尋ねるときや質問に答えるときの話し方を考えながら聞くことで理解し合う。</p>	<p>「どちらを 選びますか」 二つの立場から考え、立場の違いをはっきりさせながら比べ、どちらが説得力があるか考える。</p>	<p>「よりよい 学校生活のために」 立場の違いを明確にして、目的や条件、進行計画に沿って計画的に話し合う。</p>	<p>「提案しよう 言葉とわたしたち」 事実と感想等を区別したり、自分の体験など具体的な理由を入れたりして説得力のある提案をする。</p>
6年生	<p>「聞いて考えを 深めよう」 話し手の意見の述べ方が適切か確かめたり、自分の意見と比べたりして聞き、考えを深める。</p>	<p>「いちばん 大事なものは」 いろいろな考え方を聞いて、自分の考えを広げたり深めたり、新しい視点をもったりする。</p>	<p>「みんなで楽しく 過ごすには」 目的や条件に応じて、自分の考えの根拠を明らかにしたり相手の考えをよく聞いたりして、計画的に話し合う。</p>	<p>「今、私は、ぼくは」 聞き手に合わせたり、資料提示をくふうしたりして、自分の思いや考えを効果的に伝える。</p>

【「話すこと・聞くこと」を横（学級の1年）で見ると】

- ◆国語の教科書（光村図書）では、1年生を除いたすべての学年で、「話すこと・聞くこと」領域の各系列の指導時期は、前項のように設定されています。
- ◆「話すこと・聞くこと」領域の1年間の指導時期は、学級づくりの過程と大きな関わりがあります。「話すこと・聞くこと」領域の授業の中で学級に関する話題を設定したり、反対に、「話すこと・聞くこと」領域で学んだことを日々の学級づくりへと生かしたりしていくなど、「話すこと・聞くこと領域と学級づくりを相互に関連させる」という視点が大切です。
- ◆コロナ禍で様々な制限がある状況ではありますが、北海道国語教育連盟としては、この指導時期を基本として進めることが子どもや学級のよりよい成長へつながると考えています。

話すこと・聞くこと



よい聞き手を目指しながら、メモや質問する力も磨いていく。



必然性のある話題で、話し合いのプロセスや進め方を学ぶ。



資料を見せながら話す、スピーチの力を身に付ける。

光村図書 HP 参照

「耳を傾ける」系列
(1学期)

「話し合う」系列
(2学期)

「声を届ける」系列
(3学期)

「自分が何かを話したら、友達は真剣に自分の話を聞いてくれる。」。子どもがこのような思える状況でこそ、話し手は育ちます。つまり、話し手が育つためには、よりよい聞き手を育てる必要があります。1学期は、お互いの話に耳を傾け合える、安心感のある学級風土を醸成する時期です。

話し手と聞き手が育つ安心感のある学級では、子どもが互いに自分の思いを伝え合うことができます。2学期は、子ども同士の思いの伝え合いを通して、学級が成長する時期です。学級・学年に関わること等、子どもにとって必要感のある話題を設定することで、授業と学級経営の関連はより強まっていきます。

3学期は、一人一人が自信をつけ、自信をつけた個が集まったクラスが成熟する時期です。スピーチなどの個から集団へ伝える場は、個が自信をつけた3学期に行うことでその価値はさらに大きくなります。また、他領域で学んだことがスピーチの構成に生かされるようにすることで、国語における学びも自覚できます。



学級づくり

2. 現段階の課題とその対応

◆コロナ禍（3密、飛沫、ソーシャルディスタンス）において、感染症対策をしながらどう授業を成立させるか

ここまで新学習指導要領における「話すこと・聞くこと」のポイントを見てきました。

しかし実際は、人と人が向き合い、耳を傾けたり必死に伝えたりして進めることが中心となる「話すこと・聞くこと」では、コロナ禍という状況の中、全てをこれまでと同様の形で進めるのは難しいかもしれません。ではこのような状況で、新学習指導要領で目標とする力を育むには、どのようなことが課題となり、どういった工夫が求められるのでしょうか。



そこで、「3密」を避けて「話すこと・聞くこと」の学習を展開しようとする時、「実際に授業が成立するか」「児童の評価は可能なか」という2点で、各系列を整理してみました（下の表）。判断基準としては、授業中の活動の中で児童同士が「密閉空間」で「密接」「密集」とならない、ということです。

文部科学省では、「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」を示しており、感染症対策を講じてもお感染のリスクが高い学習活動例を挙げています。具体的には、「近距離での活動」「長時間にわたり対面形式となるグループ活動」「近距離で一斉に大きな声で話す活動」があり、そういった活動を伴わなくても成立する場合は○、伴う場合は△として分類しました。

「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」（文部科学省HP）



すると、「聞くこと（耳を傾ける）」「声を届ける（話すこと）」については、活動の工夫によって児童同士が「対面」にならずに距離を保つ工夫をすることで、ある程度授業が成立できるのではないかと考えました。一方、「話し合う」「対話」については、活動の中で児童同士が「対面」となり、授業の成立が難しいのではないかと考えました。

表 コロナ禍における「話すこと・聞くこと」の授業と評価について（連盟作成）

系列	主な内容	授業が成立するか	評価できるか
耳を傾ける	<ul style="list-style-type: none"> ◆しっかり聞き、質問を考えたり、実際に質問して考えを引き出したりする。 ◆メモを取りながら聞く。 ◆述べ方が適切か考えたり自分の意見と比べたりする。 	<p>○</p> <p>※話し手と聞き手のソーシャルディスタンスを確保して活動することが可能。</p>	<p>○</p> <p>※聞くテスト、メモの内容を観察することなどで可能。</p>

話し合う	<ul style="list-style-type: none"> ◆道案内の仕方を考える。 ◆互いの考えを認め合い、整理しながら話し合う。 ◆自分とは違う立場で考える。 ◆2つの立場から考える。 ◆色々な考えを聞き、考えを深めたり広げたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> △※話し合う中で整理したり考えをつくったりする必要があり、対面形式が基本となる。 	<ul style="list-style-type: none"> △※児童同士が話し合う活動を見取ることが評価の基本となるため難しい。
対話	<ul style="list-style-type: none"> ◆考えを出し合って問題の答えを考える。 ◆相手の考えのよさや、自分の考えと同じところを考える。 ◆役割を決めて意見を整理し、見通しをもって話し合う。 ◆目的や条件、計画に沿って話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> △※児童同士が言葉のやり取りを繰り返す必要があり、対面形式が基本となるため。 	<ul style="list-style-type: none"> △※「話し合う」と同様、児童の活動を見取ることが評価の基本となるため、難しい。
声を届ける	<ul style="list-style-type: none"> ◆面白さやもっと知りたいことを考えて聞く。 ◆声の大きさや速さを考えて話す。 ◆相手や目的に応じて話す。 ◆必要に応じて資料を使う等して話す。 ◆説得力のある提案をする。 ◆思いや考えを効果的に話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○※話し手と聞き手のソーシャルディスタンスを確保して活動することが可能。 	<ul style="list-style-type: none"> ○※題材設定のメモや、話し手が伝える様子の観察をすることなどで可能。

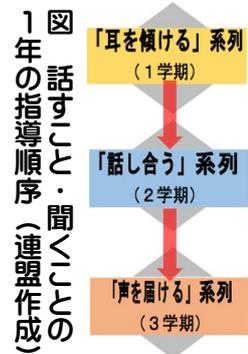
もちろん、単元を入れ替え、「話し合う」「対話」については学年の後半に位置付け、今のような状況が改善したら実施する、という方法もあるでしょう。

しかし、コロナ禍という状況が今後必ず改善していく、という保証があるわけではありません。

さらに先にも述べたように、1学期に「耳を傾ける」、2学期に「話し合う・対話」、そして3学期に「声を届ける」という指導時期を基本として進めることが、一人一人の子どもや子どもたちの所属する学級のよりよい成長へとつながる、と私たちは考えています。

その考えに基づくならば、「話し合う・対話」についても、教材化や活動の工夫により、学習活動における感染予防のためのガイドラインに配慮しながら、あらかじめ設定されている時期に授業ができるようにするべきではないか、と思うのです。

そこで、本連盟では話し合いを重ね、活動が本来の目標から外れないようにしながらも、学習活動を成立させる工夫を提案することとしました。それが、「コロナ禍における4つの対策（以下「コロ対）」「家庭との連携のポイント」です。



コロナ禍における4つの対策

コロ対

①「テスタンス」作戦

障壁となるようなものを子どもと子どもの間に設置したり、距離を置いて他者とやり取りできるよ

A3サイズのラミネートフィルム（厚さ150ミクロン以上がおすすめ）とファイルスタンドを組み合わせると、安価にパーテーションが用意できます。



うな方法（電話等）を用いたりして、密を避けることができるようにする作戦。その際、子ども同士の距離は原則1m確保し、さらにマスクを着用した状態で活動するようにします。

②「ICT活用」作戦

動画撮影および動画視聴、リモート通話等を活用しながら他者とやり取りできるようにし、子ども同士が密となることを避ける作戦。自分たちで動画を撮影することについては、ビデオカメラよりも、撮影したらすぐ視聴できるカメラ付きタブレット端末が使いやすくよいです。その際、タブレット端末の操作についてもしっかり指導しておけば、より円滑に活動を進めることが可能となります。



③「モノの共有」作戦

子どもが作成した原稿、図や表、思考ツール等、様々な情報について、ホワイトボードに掲示する等の方法を取り、他者と一緒に精察しながらやり取りを行うことができるようにする作戦。

他者と同一の情報を共有することで、やり取りを円滑に行うことができるとともに、同一の方向を向いてやり取りができ、対面となるのを避けることができます。



④「1対多」作戦

対面で他者と「1人対1人」となるのではなく、1人と多人数でやり取りを行う形、つまり「1人対多人数」とする作戦。その際、1人と多人数は一定の距離をとり、多人数のほうは同一方向を向くようにします。そのようにして感染予防をする作戦。

家庭との連携のための4つのポイント

家連携

ここで伝えたいのは、家庭の教育力を生かすことで、学習活動を成立させる工夫です。

例えば言語活動が「スピーチ」なら、「学校でスピーチを考え、練習し、実際に発表する相手（聞き手）を家族とする。」「スピーチを家族に行い、もらった感想をもとに、自分のスピーチについて気が



付いたこと等をまとめる。」といった形で、家庭での学習活動を単元に位置付けることが考えられます。

また「対話」であれば、「学級で共通テーマを決め、そのことについて家族で話し合いをし、結果を学校で報告する」といったことも可能となります。聞き手や対話の相手を家族とすることで、活動できることの可能性は広がっていくのです。

一方、家族を学習活動に位置付けることによる弊害も考えられます。

例えば、家族の協力が得られない家庭はどうすべきかといった問題、あるいは、家族を位置付けることで本人の意思とは別の考えが入り、本人の願いに適った活動とならないことの問題なども考えられるのです。そこで、そのような弊害をなるべく避け、効果的な学習となるように注意することが求められます。

そこで私たちが考えた家庭との連携のためのポイントは、次の通りです。

①子ども・保護者への周知

家庭での学習内容や、取り組む際に配慮すべき点等について、子どもはもちろん、保護者にも分かりやすく周知します（お便り等で知らせる、懇談会で伝える等）。

②時間の目安を示す

取り組むのにどの程度の時間をかけるのか、子どもと保護者に目安を示します（保護者の負担軽減のために長時間かかるような活動は設定しません）。



③活動期間の余裕

家庭で取り組むのに一定の期間を設けます（各家庭の状況に配慮する）。

④活動状況のチェック

途中で家庭での取り組み状況を確認し、家庭の協力を得ることが難しい場合への対応を行います。



この4つのポイントを踏まえ、家庭との連携を図っていくようにします。

◆この状況を踏まえた新たな提案について

ここまで、感染予防のためのガイドラインに配慮しながら、学習活動を成立させる工夫として、「コロナ禍における4つの対策（以下「コロ対」）」「家庭との連携のポイント」を提案しました。

コロナ禍という状況がいつまで続くかは不透明であり、感染予防をしっかりとしながら手立てを講じて実践することは、今後も求められるでしょう。

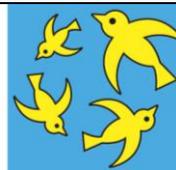
かといって、感染症対策が必要な状況というのは、国語科の学習として活動の制限や縮小

だけが求められ、子どもにとって資質・能力を育む弊害だと捉えるべきなのではないでしょうか。

新しい学習指導要領では、平成20年度から実施の学習指導要領に続き、「生きる力の育成」を掲げています。そして今回のその中では、「これからの社会が、どんなに変化して予測困難な時代になっても、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現してほしい」と述べられています。

生きる力

子ども一人一人が、**予測できない変化に**受け身で対処するのではなく、**主体的に向き合**って関わり合い、その過程を通して、**自らの可能性を発揮し**、よりよい社会と幸福な人生の創り手となれるように。



生きる力の育成（文部科学省HP）

コロナ禍というのは、まさに予測困難な事態の下といえます。そういった中においても、子どもが自ら学び、考え、判断して活動していく、それこそが資質・能力を育むということなのではないでしょうか。

「話すこと・聞くこと」でいえば、どのような状況に置かれたとしても、相手の話をしっかりと受け止めたり、工夫して伝えたりする力を一層高めていくことが、本当に生きて働く力だといえるでしょう。そう考えると、現在の状況を踏まえながら新たな視点をもって授業作りを行い、提案していくことが必要だと考えるのです。

このことを、私たちは「新たな『話すこと・聞くこと』」として提案します。

新たな「話すこと・聞くこと」

新話聞

「新たな『話すこと・聞くこと』」は、次の3点から授業を創ります。

①目標設定を明確にして新たな活動や単元を構想する

学習指導要領に示される目標に準拠しながらも、教科書に示される活動にとらわれず、新たな視点で活動や単元を構想し、具体化します。

②知識・技能と思考・判断・表現のバランスを重視

子どもが、目的意識や自分で設定した目標に基づきながら、獲得した知識・技能を生かし、思考・判断・表現できるように活動を設定します。

あるいは、思考・判断・表現する中で、必要な知識・技能を獲得できるようにします。

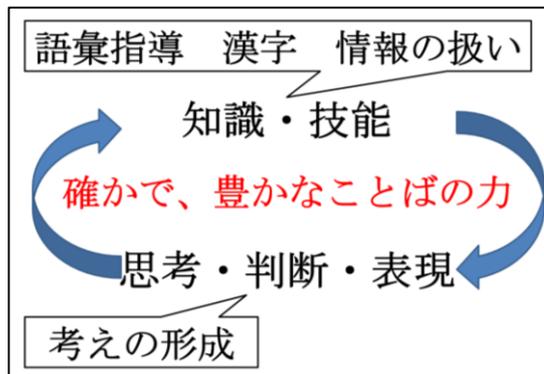


図 新指の国語科のポイント(連盟作成)

③子どもの「情」を大切に、活動を通して「知」を獲得できるようにする

単元の導入時に子ども自身が「話すこと・聞くこと」の活動に取り組みたいくなるよう手立てを講じます。

あるいは、「分かる」と「できる」の間にズレを生み、子どもの中に「不足感」「困り感」が醸成されるよう手立てを講じて、活動を通して新たな「知」を獲得できるようにします。



図 国語科における単元構想のイメージ（連盟作成）

④この状況を踏まえた教材化を図る

学習指導要領に示される目標を基にしながら、コロナ禍という制限された状況だからこそ求められる「話すこと・聞くこと」の授業を構想します。例えば、言語だけでなく非言語を取り入れ、その効果について理解を深める言語活動が考えられます。

この4点を踏まえ、「新たな『話すこと・聞くこと』」の授業を提案します。

3. 授業実践例

◆「話すこと・聞くこと」領域における3系列+対話系列の授業実践例を6本掲載。全系列、全ブロック（1・2年、3・4年、5・6年）の単元を網羅することで、掲載した実践以外にも活用可能を目指す。

◆コロナ禍において大切な3つの視点（ **コロ対** **家連携** **新話聞** ）で単元を具体化。

系列	「耳を傾ける」系列 (1学期)	対話の練習系列 (話し合う)系列前) <small>ただし、1年生のみ、発達段階を考慮し、この順ではない。</small>	「話し合う」系列 (2学期)	「声を届ける」系列 (3学期)
1年生	「ききたいな、 ともだちのはなし」 知らせたいことを聞き手の方を向いて話し、聞き手は最後まで話を聞き、質問等を行う。		「これはなんでしょう」 二人で考えを出し合い、問題やヒントを決め、やりとりをして問題の答えを考える。	「ともだちのこと しらせたい」 面白いところやもっと知りたいことなどを考えながら友達の話の聞く。
2年生	「ともだちをさがそう」 大事なことを落とさないように話し、メモを取りながら聞く。 「あつたらいいな こんなもの」 言葉の使い方を考えながら、質問をして相手の考えを引き出す。	「道案内のしかた」 通る道の順や目印になるものなどを考え、道案内の仕方を考える。	「そうだと のってください」 話題を考えながら、友達のよいところや考えが同じところを考えて話し合う。	「楽しかったよ 2年生」 伝えたいことを詳しく書き出し、聞き取りやすい声の大きさや速さを考えて話す。
3年生	「もっとしりたい ともだちのはなし」 内容や知らせたいことをはっきりさせ、話す人をしっかりと見て話し、聞き手はどのような質問をしたらよいか考えながら聞く。	「山小屋で三日間 すごすなら」 互いの考えを認め合い、整理しながら話し合う。	「はんで意見を まとめよう」 役割を決めて意見を整理しながら見通しをもって話し合う。	「わたしたちの 学校じまん」 聞き手の様子を見ながら、声の強弱等に気を付けて相手や目的に応じて話す。
4年生	「聞き取りメモの くふう」 書き方をくふうしながら大事なことを落とさずにメモしたり、メモを読み返して整理したりする。	「あなたなら どう言う？」 自分とは違う立場になって考える。	「クラスみんなで 決めるには」 役割を意識しながら話し合ったり、自分の立場を明らかにして話したりする。	「調べて話そう 生活調査」 大事なことが伝わるように声の大きさや速さ、強弱に気を付けたら、必要に応じて資料を使ったりして話す。
5年生	「きいてきいて きいてみよう」 尋ねるときや質問に答えるときの話し方を考えながら聞くことで理解し合う。	「どちらを 選びますか」 二つの立場から考え、立場の違いをはっきりさせながら比べ、どちらが説得力があるか考える。	「よめよめ 学校生活のために」 立場の違いを明確にして、目的や条件、進行計画に沿って計画的に話し合う。	「提案しよう 言葉とわたしたち」 事実と感想等を区別したり、自分の体験など具体的な理由を入れたりして説得力のある提案をする。
6年生	「聞いて考えを 深めよう」 話し手の意見の述べ方が適切か確かめたり、自分の意見と比べたりして聞き、考えを深める。	「うちばん 大事なものは」 いろいろな考え方を聞いて、自分の考えを広げたり深めたり、新しい視点をもったりする。	「みんなで楽しく 過ごすには」 目的や条件に応じて、自分の考えの根拠を明らかにしたり相手の考えをよく聞いたりして、計画的に話し合う。	「今、私は、ぼくは」 聞き手に合わせたり、資料提示をくふうしたりして、自分の思いや考えを効果的に伝える。

実践例の見方

年

～系列
(実施学期)

指導事項の系統

指導事項をもとに、各系列の単元のつながりについて示しています。
実践を行う際には、特に2学年ごとのつながりを意識することが大切になります。

時	単元構成	
①		
②		
③	<p>単元の流れを大まかに記載しています。 その中で、コロ対 家連携 新話聞 の 3つの視点のうち、どれを取り入れて授業 作りを行ったかを分かりやすく示していま す。</p>	具体例
④		
⑤		
⑥		
⑦		

各授業時間のうち、工夫した部分について具体例として解説しています。単元構成と同様に、3つの視点のどれかが分かるように示しています。

具体例

具体例

2年

「耳を傾ける」系列 (1学期)

単元名

「あったらいいな こんなもの」

指導事項の系統

「ともだちをさがそう」
大事なことを落とさない
ように話し、メモをとり
ながら聞く。

「あったらいいな
こんなもの」
言葉の使い方を考えなが
ら、質問をして相手の考
えを引き出す。

「もっとしりたい
ともだちのはなし」
内容や知らせたいことを
はっきりさせ、話す人を
しっかりと見て話し、聞
き手はどのような質問を
したらよいか考えながら
聞く。

時	単元構成
①	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の挿絵や教師のモデルを見て、どんな道具なのか想像を膨らませる。 言語活動について知り単元の見通しをもつ。 「あったらいいな、こんなもの」発表会をしよう。 「今はないけれど、こんなものがあったらいいな。」と思う道具を思い浮かべ、ノートに書く。
②	<ul style="list-style-type: none"> 一番欲しい道具を決めて、絵に描く。 ※情報を共有する場で役立つよう大きめに描く。 道具の効果について、短くまとめる。
③	<ul style="list-style-type: none"> 教師のモデルを基にして、質問をしたり答えたりしながら詳しく考える過程を確認する。 ペアを作る。絵を見せながら道具の説明をし、質問を受けながら、詳しく考える。 ｺｺ対 質問や交流の内容を全体で共有する。
④	<ul style="list-style-type: none"> 前時の学習を生かし、ペアを替えて交流する。
⑤	<ul style="list-style-type: none"> 発表の仕方を確かめ、発表メモを作成する。 発表の練習をする。 家連携
⑥	<ul style="list-style-type: none"> グループで発表会を行う。 ｺｺ対
⑦	<ul style="list-style-type: none"> 学習を振り返る。

ｺｺ対 話し合いの場の工夫

ペアで質問・応答をする活動では、やり取りを繰り返すことで「あったらいいな」と思うものが詳しくなっていくことを実感させたい。そのためには、即時的な双方向性が重要となる。しかし、質問・応答に夢中になると、ついつい近づいて話をしたくなるのが低学年の子どもたちである。そこで、糸電話を使うと距離を保ったままコミュニケーションを取ることができ、質問・応答を繰り返す過程をより明確に意識することができるようになる。また、糸電話にネーミングをして、「あったらいいな」の道具（詳しく知りたいことを教えてもらえるもの）として紹介すると、子どもの意欲にもつながる。



家連携 発表練習

発表の練習には、声の大きさも必要であるため、学校では十分な時間と場所の確保が難しい。学級通信等で連携を図り、発表のポイントを示したカードを持ち帰るなどして家庭と連携して進めていきたい。

ｺｺ対 発表の場の工夫

相手の表情や反応が見える状況で話をすることは、子どもたちにとって大切な経験である。そこで、道具についての大きな絵を見せながら発表することにより、距離を取りながら情報を共有できるようにする。聞き手も、自然な意識で同じ方向を向いて発表を聞くことができる。スペースを十分に確保することが難しい場合には、発表の感想やよかったところを手紙に書いて伝えるなど、聞き手のリアクションの一部分を書く活動に置き換えることも考えられる。



3年

対話の練習系列

(「話し合う」系列前)

単元名

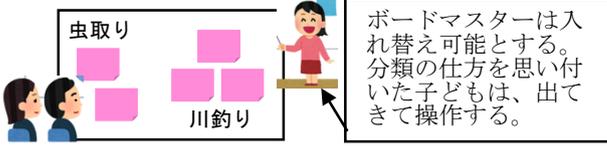
「山小屋で三日間すごすなら」

指導事項の系統

「道案内のしかた」
通る道の順や目的になるものなどを考え、道案内の仕方を考える。

「山小屋で三日間
すごすなら」
互いの考えを認め合い、整理しながら話し合う。

「あなたなら
どう言う？」
自分とは違う立場になって考える。

時	単元構成	
①	<p>◆「山小屋で過ごす」という設定と条件を知り、言語活動と単元の見通しをもつ。 新話聞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「山小屋マップ」として、周辺にあるものや自然環境を想像し、地図に書き込む。 <p>◆マップを基に、自然の中でしたいことを考えて付箋に書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入山条件を確認しながら、全体で「自然の中でしたいこと」を交流する。 ・全体交流後、個々が書いた「自然の中でしたいこと」をグループの対話ボードに貼る。 	<p>新話聞 条件の具体化→必要感</p>  <p>「山小屋マップ作り」という活動を単元の導入で設定し、山小屋で三日間過ごすという条件に対して個々が具体的にイメージできるようにする。<u>条件設定を自分に引き寄せることで、どんなことがしたいのか、どんな持ち物を持っていきたいのか、グループで話し合う必要感を高められるようにする。</u></p>
②	<p>◆「山小屋に持っていきたいもの」をグループで話し合い、考えを広げる。 コ対</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対話ボードに貼った「自然の中でしたいこと」を基に、持っていきたいものを付箋に書く。 ・グループで、持っていきたいものを分類したり整理したりする。 <p>◆「山小屋に持っていきたいもの」をグループで話し合い、考えをまとめる。 コ対</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの様子を撮影した動画を基に、考えをまとめる際に意識すべき話し合いの仕方について考える。 新話聞 ・「優先順位を決める」「目的に合うか考える」などの観点を意識して話し合う。 	<p>コ対 対話ボードの活用</p>  <p>話し合う場では、付箋と対話ボードを活用する。この単元は、司会を立てず、自由に意見を出しながら考えをまとめたり広げたりする話し合いが想定されている。しかし、グループで対面して話し合う活動は難しいため、<u>付箋を動かす『ボードマスター』という役割を設定する。グループ内で各自が付箋をボードに貼り、そのボードを見ながら一方向を向いて話し合いを進める。</u>ボードマスターは、意見を聞きながらボード上の付箋を動かし、整理・分類を行う。</p> <p>新話聞 コ対 動画視聴→試す場へ</p> <p>「まとめる話し合い」の前に、話し合いの様子を撮影した動画（教師の例／児童の例など）を視聴する場を設ける。「まとめる話し合い」で意識する観点と、<u>実際に使う言葉の具体的なイメージが共有されることで、対面する話し合いの形を取れない場合も、個々が目的に沿って意見を出してまとめられるようにする。</u></p>

5年

対話の練習系列 （「話し合う」系列前）

対話の練習

「どちらを選びますか」

指導事項の系統

「あなたなら
どう言う？」
自分とは違う立場に
なって考える。

「どちらを
選びますか」
二つの立場から考
え、立場の違いをは
つきりさせながら比
べ、どちらが説得力
があるか考える。

「あなたなら
どう言う？」
自分とは違う立場に
なって考える。

時	単元構成	新話聞 「比べる力」の育成
<p>◆テーマ設定時の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モニター役の児童が判定する際の根拠になるような条件を設定する。 ・テーマを伝えた時に、子どもたちが意見を伝えたいくなるような工夫があるとよい。 <p>Ex. 1)「家でペットを飼いたい！（教科書通り）」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休日に家でペットと過ごしたい。犬 or 猫？ ・依頼者：校長先生 <p>Ex. 2)「短い夏休みを楽しみたい！」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の状況でも安全に楽しめるのは、海 or 山？ ・依頼者：学級担任 <p>Ex. 3)「図書館にコーナーを開きたい！」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「作者」でコーナーを作るなら、「レオ＝レオニ（スイミー）」or「斎藤隆介（モチモチの木）」？ ・依頼者：図書館司書 <p>① ※設定した「依頼者」に協力してもらい、動画を撮影し、実際に流すと効果的である。</p> <p>②</p>	<p>◆討論の流れ</p> <p>新話聞 コロ対</p> <p>（討論参加者とモニター役を入れ替えて、計2時間、討論を行う。本単元の指導事項や配当時数を考えると、司会者は子どもがする必要はない。むしろ、教師が司会をすることで、思考ツールを効果的に活用しながら、「立場の違い」を明確にして、「話し合う」系列へとつなげることができると思う。）</p> <ol style="list-style-type: none"> （1）テーマを子どもに伝える。 （2）各チームが意見を言う。 （3）質疑応答をする。 （4）質疑応答の様子を踏まえ、モニター役がどちらが説得力があったかを判定する。 （5）教師による助言等を行う。 	<p>新話聞 「比べる力」の育成</p> <p>対話の練習系列 （「話し合う」系列前）</p> <p>「話し合う」系列 （2学期）</p> <p>ベン図</p> <p>座標軸</p> <p>対話の練習系列は、<u>全学年「話し合う」系列の前に位置付けられている</u>。前項の系統表からも分かる通り、<u>指導事項のつながりも明確</u>である。5年生の<u>両系列のキーワードは、「立場の違いを明確にする」こと</u>。違いを明確にするためには、「比べる」という思考が必要である。「比べる」思考ツールを活用して、子どもの考えを見る化し、互いの考えを比較しながら話し合えるようにしていく。「情報」との関連も図りながら、子どもの「比べる力」の育成を図りたい。 （教科書参照：ベン図⇒P. 249、座標軸⇒P. 132）</p>
		<p>コロ対 「教師対子ども」：同一方向対話</p> <p>ICT活用によって、同一方向対話でも、互いの顔が見えるようにすることができる。討論を録画し、モニター役の判定の根拠にした発言を再生するとより効果的である。</p> <p>短冊や付箋等を活用することで、発話量を減らすことができる。</p> <p>司会を教師が務めることで、「教師対子ども」の状況を作り、子ども全員が同一方向を向いて話せるようにする。</p> <p>犬派</p> <p>猫派</p> <p>モニター</p> <p>「教師対子ども」形式の対話のデメリットは、<u>一人一人の話し合いへの参加度が低いこと</u>にある。そこで、本単元後の「話し合う」系列では、<u>ホワイトボード・サイド黒板を活用したり、模造紙と短冊・付箋を活用したりして、同様の場を複数設置</u>することで、<u>コロナ対策を講じながら、対話の機会を増やす</u>ことができると考える。</p>

1年

「話し合う」系列
(2学期)

単元名 これは なんでしょう

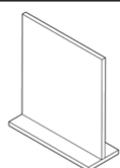
「わくわくどきどきクイズをしよう」

指導事項の系統

「これはなんでしょう」
二人で考えを出し合い、
問題やヒントを決め、や
りとりをして問題の答え
を考える。

「そうだんに
のってください」
話題を考えながら、友達
のよいところや考えが同
じところを考えて話し合
う。

「はんで意見を
まとめよう」
役割を決めて意見を整理
しながら見通しをもって
話し合う。

時	単元構成	ポイント
①	<p>【活動Ⅰ】 単元の見通しをもち、活動条件と伝え合うために必要な事柄を知る。</p> <p>「ヒントクイズに挑戦しよう」 ココ対</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2者でヒントを出したり、答えを当てたりする。 ・答えに関係するヒントを出すことを理解する。 <p>「お互いにわくわくどきどきしたいな」</p>	<p>ココ対 クイズの場の工夫</p> <p>活動Ⅰでは、「ヒントクイズ」を、児童が解答者として実際に体験してみる。教師が出題者となり、様々なパターンの問題に取り組みさせる。児童に答えを考えさせる中で、話し合う活動への意欲付けを図る。活動を通して、解答者(=聞き手)の立場を一度経験させるとともに、「伝え合うために必要な事柄」について、クイズという条件なら何が必要なのかを考えさせる場とする。</p> <p>ここで感染症対策として、<u>答え一覧を黒板に貼り出し、全員が同一方向を向いてクイズに参加できるようにする(「モノの共有作戦」)</u>。</p> <p>この作戦は、活動Ⅱ、活動Ⅲで友達とペアでクイズを出し合う際にも有効である。</p> 
②	<p>【活動Ⅱ】クイズの話題決めと事柄探しを行う。</p> <p>「クイズ作りをしよう」 新話聞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近なものが答えになるようにし、色・形・大きさや、いつ、何に使うかをヒントにしてクイズを出し合う。 	<p>新話聞 3ヒントという条件で</p> <p>クイズでは、「お互いがわくわくどきどき」「答えを当ててもらおう」「答えを当てる」という目的で活動する。その際、「<u>ヒントの数は3つ</u>」という条件にする。やみくもにヒントを出すのではなく、ヒントの内容や順序に目を向けられるようにするのである。目標にせまる手立ては、「クイズを出し合って試す場」「一つのクイズをよりよいものになるようつくる場」「改めて『わくわくどきどき』になるようクイズを出し合う場」と、出題者と解答者の両面から考える3つの場を設定し、活動を通して理解を深められるようにする。</p> 
③	<p>【活動Ⅲ】 ココ対</p>	
④	<p>よりよく伝える視点を見だし、決定する。</p> <p>「ヒントの数を決めてクイズを出し合おう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重要度や優先度を考える。 	<p>ココ対 表情や身振りが見える工夫</p> <p>ペアでクイズを出し合う際、「モノの共有」作戦に加え、「ディスダンス作戦」も取り入れる。<u>透明ラミネートでペア同士の間壁を作る</u>。透明とすることで、相手の表情や身振りが見えるようにする。</p> 
⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・3つのヒントがつながると分かりやすいことを理解し、出題者も解答者も最後は笑顔で終わることができるよう心がける。 	
⑥		

4年

「話し合う」系列 (2学期)

単元名

「クラスみんなで決めるには」

指導事項の系統

「はんで意見を
まとめよう」
役割を決めて意見を
整理しながら見通し
をもって話し合う。

「クラスみんなで
決めるには」
役割を意識しながら
話し合ったり、自分
の立場を明らかにし
て話したりする。

「よりよい
学校生活のために」
立場の違いを明確に
して、目的や条件、進
行計画に沿って計画
的に話し合う。

時	単元構成	新話聞
①	<p>◆学級の話し合いの様子を撮った動画を視聴し、単元の見通しをもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> 全体交流で、「進行役の必要性」「発言者の工夫」について問題意識が高まるようにする。 事前に、学級活動を利用して学級全体で話し合いを行う。その様子をビデオに撮っておく。 	<p>ねらいに沿った機会の保証</p> <p>この単元では、司会グループ（司会、記録、時間）、発言者それぞれの役割を理解し、その役割に応じて話し合いに参加し、考えを形成する姿をねらう。<u>学級を半分に分けたチームの話し合い→学級全体での話し合いと段階を踏むことで、多くの役割を経験する機会を保障し、互いの意図を理解しながら参加する態度と力を養うようにする。</u></p>
②	<p>◆話し合って決めたい議題について交流し、計画を立てる</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもの現状（問題や課題、取り組んでいる活動等）からつながる事柄を議題に設定する。 <p>Ex. 1) 「地域へのお礼の会の内容（教科書通り）」（総合） Ex. 2) 「ペア学年との交流会の内容」（行事） Ex. 3) 「学年で挨拶パワーアップ作戦」（学活）</p>	<p>バディ制で学びを連続</p> <p>立場をはっきり伝えて！</p>
③	<p>◆学級の半数で話し合って決める【話し合い①】</p>	<p>話し合いの問題点や解決策を各自が意識できるように、モニタリングを複数人バディ制にする。モニター役は、客観的に話し合いの流れを捉えた上でバディである相手グループに対して見ていて気付いたことを具体的に伝えたり、気付いたことや全体で学んだことを基に、次の回で話し合いを進めたりできるようにする。</p>
④	<p>・【話し合い①】の前に、全員で動画を視聴しながらモニター観察の仕方を考える。</p>	
⑤	<p>◆学級の半数で話し合って決める【話し合い②】</p> <ul style="list-style-type: none"> その話し合いでどのような意識を生むのか明確にねらい、つながりのある学びにする。 【話し合い①】 進行役への問題意識をもつ →動画で進行役のコツを見付け試す 【話し合い②】 発言者への問題意識をもつ →動画で発言するコツを見付け試す 【話し合い③】 人数が増えた際の問題に着目 →動画で全員が納得する進行、発言のコツを見付け試す 	
⑥	<p>◆学級の半数で話し合って決める【話し合い②】</p>	<p>注目カードで課題を可視化</p>
⑦	<p>◆学級全員で話し合って決める【話し合い③】</p>	<p>コロナ禍では、対面して話し合うことに制限がかかる。モニター役が、個々にアドバイスする際にも、対面せずとも課題点が見えるように、<u>話し合い参加者の机の上に「注目カード」を置くようにする。個々が自分の話し合いにおける課題点や意識したいコツを示すことで、モニター役がその課題を意識しながら見られるようにする。</u></p>
⑧	<p>◆学んだことを振り返る→別の議題で試す ※他教科や学活で試す場を設けることも有効。</p>	

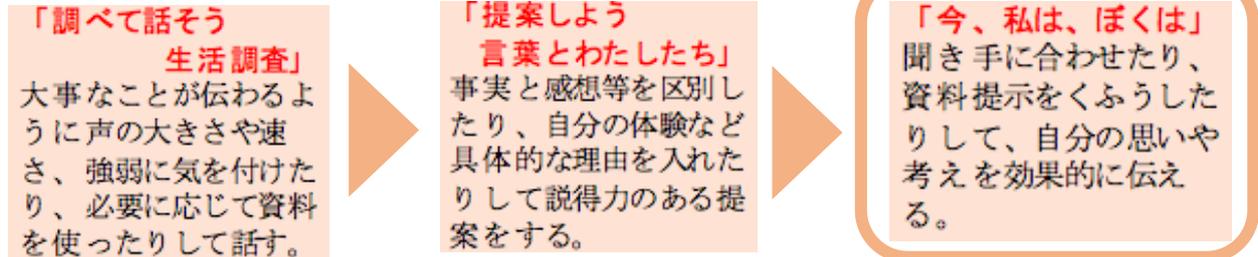
6年

「声を届ける」系列 (3学期)

資料を使って、効果的なスピーチをしよう

「今、私は、ぼくは」

指導事項の系統



時	単元構成	新話聞	相手意識の捉えの変化
①	<ul style="list-style-type: none"> 言語活動について知り単元の見通しをもつ。 Ex. 1) 「卒業スピーチをしよう (教科書通り)」 (3学期) Ex. 2) 「“今”の6年生から、“次”の6年生へ」 (2学期) Ex. 3) 「今、学校のためにできること」 (1学期) <ul style="list-style-type: none"> 伝えたいことを書き出す。 ※思考ツールを活用し「情報」との関連を図る。 	<p>相手に何を伝えようかな。</p> <p>アンケート結果の提示</p> <p>こういう意識の相手の心に届くには…。</p> <p>単元初期の相手意識 アンケート後の相手意識</p>	<p>単元初期段階の子どもの意識は、「自分が相手に伝えたいこと」にある。スピーチ相手の今の意識を子どもが知ることで、「相手がそう思っているなら…」と、相手意識の捉えに変化が生まれるようにする。変化した相手意識のフィルターを通して、子どもがスピーチメモや資料等、自分の言葉を見直していけるようにする。</p>
②	<ul style="list-style-type: none"> スピーチメモや資料を作成する。 家連携 ※付箋を活用することで、「話すこと」における学習過程の行き来ができるようにする。 	<p>家連携 スピーチメモ・資料作成/スピーチ練習</p> <p>特に、スピーチ練習には、声の大きさも必要であるため、学校では十分な時間と場所の確保が難しい。学級通信等で連携を図り、家庭と連携して進めていきたい。</p>	
③	<ul style="list-style-type: none"> ※他領域の既習事項を生かせるようにする。 		
④	<ul style="list-style-type: none"> アンケート等の活用により、相手意識を明確にする。 新話聞 		
⑤	<ul style="list-style-type: none"> スピーチメモの再構成や資料の修正、取捨選択をする。 家連携 スピーチに向けて練習する。 ※ICTを活用して自分のスピーチの様子を見たり、子ども同士でお互いのスピーチを見合ったりすることができるようにする。 	<p>コロ対 スピーチの場の工夫</p> <p>Ex. 2)、Ex. 3)の場合 (3学期に実施しない場合)</p> <p>最高学年としての自覚をもちづらい状況だからこそ、Ex. 2)、Ex. 3)のような学校生活に関連したテーマのもと、スピーチをすることが考える。そのスピーチの場を、給食時間のTV放送にするのはどうだろうか。コロナ禍の給食時間、子どもは無言にならざるを得ないため、静かに話を聞ける環境にあるとも言える。聞き手である子どもたちにとっても、メリットは大きい。</p> <p>小規模校では、全校一斉の生放送、中規模校以上では、スピーチ映像をDVDに入れ、ビデオレター形式で各学年に配布・放送すること等が考えられる。</p>	
⑥	<ul style="list-style-type: none"> スピーチの発表をする。 コロ対 		

あとがき

北海道国語教育連盟 事務局次長
札幌市立八軒小学校 校長 亀田 和人

話すことと聞くことは、人間のコミュニケーションの根幹をなすものです。
日常生活の意思疎通の多くは、会話によって成り立っているからです。
今、その不易のコミュニケーションツールが予想もしない形で危機に瀕しています。

これまで北海道国語教育連盟では、実生活に生きる言葉の力の育成を目指して、連盟の大会だけに止まらず、様々な場面で実践研究を重ねて参りました。

- ・ 日常のリアルな場から伝えることについて考える授業がありました。
- ・ 話合いの悪例をもとに、より良い話合い方について考える授業がありました。
- ・ 友達やメディアを利用したモニタリングを通して話し方や話合い方を考える授業がありました。
- ・ 非言語の有用性について気づき、自分の表現に生かそうとする授業がありました。
- ・

私たちは「話すこと・聞くこと」においても、目の前の子どもたちが必要感をもち主体的に取り組みながら言語能力を高めるため、多様な試みを行ってきました。

今回の新型コロナウイルスをめぐる状況は、「話すこと・聞くこと」の指導において間違いなく「禍」です。しかし、そうした「禍」の中でも諦めることなく「可」を探る、あるいは「果」を求め続ける、開拓者精神を継承する北海道人でありたいものだと考えております。

今回のこの読本には、これまでの本連盟の『研究の蓄積』と制作者の『北の国語人としての心意気』が詰め込まれています。

この取組が子どもの生きる力や学びの育成を止めない一助になることを心から祈っております。

また、今後も、私たちの挑戦は続きます。

本連盟の取組に興味をもっていただき、子どもたちのために共に学んでいく方がさらに増えていくことにも、大きな期待を寄せております。

最後に、私の「連盟の一員」としての願いをお伝えして、「あとがき」とさせていただきます。

「話すこと・聞くこと」指導読本～小学校編～

2020年（令和2年）7月14日発行

発行 北海道国語教育連盟

監修 村上 智樹（札幌市立発寒西小学校 校長）

亀田 和人（札幌市立八軒小学校 校長）

著者 中島 大輔（北海道教育大学附属札幌小学校 教諭）

後藤 卓（札幌市立幌南小学校 教諭）

高桑 陽子（札幌市立幌西小学校 教諭）

黒澤 英靖（北海道教育大学附属札幌小学校 教諭）

本書の無断転載、無断複写は厳禁です。

引用・参考文献

学習指導要領 国語編（平成29年7月）

光村図書出版HP

文部科学省HP